

15. 柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について

関東学園大学	高橋	進
講道館	貝瀬	輝夫
講道館	村田	直樹
都立科学技術高校	齊藤	聡
講道館	平野	弘幸
和歌山大学	矢野	勝
群馬県警察教養課	椛澤	博之
防衛大学校	中村	一成
平成国際大学	三宅	仁

15. Changes in the Attitude of University Women in the Process of Teaching Judo by Means of Structured Group Encounter.

Susumu Takahashi	(Kanto Gakuen University)
Teruo Kaise	(Kodokan Judo Institute)
Naoki Murata	(Kodokan Judo Institute)
Satoshi Saito	(Science Technology High School)
Hiroyuki Hirano	(Kodokan Judo Institute)
Suguru Yano	(Wakayama University)
Hiroyuki Kabasawa	(Gunma Police Academy)
Kazunari Nakamura	(National Defense Academy)
Hitoshi Miyake	(Heisei International University)

Abstract

The purpose of this study was to investigate the following: (1) the attitude towards judo among university women students in judo classes; (2) subjects' sports history, custom, and need; (3) self-image in sports; (4)

the need for physical education and judo classes; (5) interpersonal relationships, self-esteem, and self-image; and (6) the effect of using the structured group encounter (SGE) exercise.

The subjects of this research chose to enroll in the judo class on their own initiative. Attitudes towards judo and the other topics were measured by the use of a questionnaire prepared by Takahashi, which was administered at the beginning and the end of the first semester. The data of attitudes were analyzed by factor analysis techniques. Factor scores were compared to assess any change in attitudes towards judo. The sum score of each item of each group was compared by t-test.

The results were as follows:

1. Only 37.2 of subjects normally participated in sports
2. 65.1% of subjects had experienced some sports in their school days.
3. The subjects thought that physical education was valuable at any stage of school education
4. Almost all the subjects liked sports.
5. It was indicated that the subjects had a good self-image as related to sports.
6. Eight attitude factors towards judo were extracted by factor analysis. Judo was recognized to have a desirable effect on the body, mind, and character.
7. The attitudes of women changed in a positive direction after participating in the SGE exercise.
8. Results indicated that the subjects had positive self-images, self-esteem, and interpersonal relationships.
9. Therefore, it was indicated that using the SGE exercise was effective in judo classes.

1. 緒言

平成10年に改訂された小学校学習指導要領の総則⁵⁾に、「学校における体育・健康に関する指導は、学校の教育活動を通じて適切に行うものとする。特に、体力の向上及び心身の健康の保持増進に関する指導については、体育科の時間はもとより、特別活動などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めることとする。(後略)」と記されている。

これは、教育課程編成の一般方針の一部として示されたものであるが、児童・生徒の心身の健康・体力上の問題を、もはや一般的な視点で捉えていないことを示唆している。体育科の教育・指導だけではなく、学校教育全体の克服すべき問題として、それらを捉えていることは自明の理である。

もともと、低年齢層に及んでいる生活習慣病、小学生の肥満などといった現象は、もはや珍しくはない。また、体力の低下についても、それが叫ばれてから久しい現象である。さらに、ティーンエイジャーの殺人事件を含む反社会・非社会的な行動の増加や、不登校や学級崩壊などといった、児童・生徒の「こころ」に関する問題も山積みにされていることは周知の通りである。

2000年1月1日発刊の朝日新聞¹⁾に、「21世紀を担う子供達に不安」という見出しで興味ある調査結果が掲載された。その中で「いまの子供達が21世紀を担うことについてどう思いますか」の質問に(2700人の朝日新聞有権者対象・面接方式)、「かなり心配だ」あるいは「多少心配だ」と回答した人は、全回答の79%にも達している。大人が子供を心配するのは、いつの世代でも常であろうが、前述のような、子供達に降り起こる様々な問題を垣間見たときに、そのような悠長なことは言い難い。社会全体が、子供達の未来に、期待ではなく大いなる不安を抱かざるを得な

い時代が到来したことの証であろう。

以上のように鑑みれば、児童・生徒における心身の健康や体力の問題は、冒頭で学校教育全体の克服すべき問題であるとしたが、社会全体のニーズとして、学校教育に託された重要な問題であることに異論を唱える者はあるまい。従って、体育科の関わる主な役割も、以前にも増して重要になったことは言うまでもない。特に、体力の向上といった身体に関わる側面に関与するだけでなく、「こころ」の問題解決への寄与も重要課題といえる。

改訂学習指導要領の小学校体育科高学年の内容から示された、「体づくり運動・体ほぐしの運動」のねらいは、正に体育が、児童・生徒の「こころ」の問題を解決し得ることを前提として掲げられている。体ほぐしのねらいである、自己の体に気付くことは、自己理解へとつながる。また、仲間と協力をして運動を遂行することは、相互理解を育むとともに、社会規範や社会での自己責任といった意識をも高揚させることとなる。これは、狭義ではあるが、國分の推奨する構成的グループ・エンカウンター⁴⁾「人間としての自分の生き方を再検討するサイコエデュケーションの一方法であり、自己理解、他者理解、人間関係などの面で有意義であると言われている」を意味するといっても過言ではあるまい。

勿論、旧来から体育で取り上げている実技種目そのものに、そのような機能は包含されている。たとえば、相手と協力して行う集団競技では、身体活動そのものをとおして、相互理解が生まれることは改めて述べる必要もない。また、体を接触させて行う身体運動がスキンシップを伴うことは必然とも言える。学級崩壊を起こしたクラスでは、その凝集性が著しく低く、いじめの起こる学級でも、孤立児、周辺児が存在するであろうが、体育活動自体によって相互理解が育まれ、このような諸問題解決に寄与してきたことは疑いもない事実である。それゆえに、「体力づくり運動・体ほぐしの運動」を特別視するのではなく、それを含めた体育実技種目全体で、今日的生徒・児童の「こころ」の諸問題解決に向き合っていくべきである。

更に、体育実技種目の中で、特にどの領域の種目がいわゆる「構成的グループ・エンカウンター」の機能を有効に活用できるかということと考えた場合、相手と直接組んで行う対人的な運動構造を有し、自他の精神的・身体的な限界を知り得る種目である「武道・柔道」を提唱したい。「武道・柔道」は、「こころ」を練るともいわれているが、そこに構成的グループ・エンカウンター概念を取り入れた授業展開を実施すれば、更なる教育効果が期待される。また、その効果を心理学的に実証していくことは、学校教育において非常に有益である。

そこで、本研究では、柔道授業に、実施上無理のない程度に構成的グループ・エンカウンターエクササイズを導入した際の、学習者の柔道に対する態度、他者理解、自己理解などの変容を調査・検討することとした。

尚、自己理解の尺度としては、ローゼンベルグらのSelf-Esttem Inventoryを参考に、坂本が作成した⁴⁾「自尊感情を測定する10項目」、並びに長島らによって開発された⁴⁾ Self-Image Inventory「自己像を探る18項目」を、他者理解を示す尺度と⁴⁾しては、片野によるInterpersonal-Relationship Inventory「人間関係を見る12項目」とし、それぞれを、授業第1時間目（履修オリエンテーション時）、及び最終授業の際に測定した。また、調査対象者は次のような理由から、柔道を選択履修した女子大学生とした。即ち①男子学生ほど柔道授業の経験が少ないと予測されること（授業効果を調査する目的から）。②次世代の母親予備軍であり、今後の武道「柔道」による教育、体育教育の更なる充実を成し遂げる上で、この世代の意識解明が重要であると考えることからである（子供のスポーツ選択は、母親のスポーツ経験に影響される）。

II 研究方法

1. 調査対象者

U大学の教養教育科目、実技柔道を履修選択した女子学生43名。

2. 調査時期

2000年4月授業第1時間目（履修オリエンテーション時）、並びに第14時間目最終授業（90分1コマ）。

3. 授業計画

単元計画の内容と目標については、資料1に示した。また、指導案については、14時間分を添付することが、紙面の都合上不可能であるため2時間分のみを記載した。尚、どの部分が構成的グループ・エンカウンターのエクササイズかについては、指導案上網掛けをして示してある。

4. 調査内容

質問の内容は、以下の項目・尺度から構成されている。

(1) 一般項目（対象者の属性）。学籍番号を除いては第1回目のみ調査。

学籍番号、性別、年齢、現在の運動習慣、現在及び過去の運動クラブ活動経験、クラブ活動時の両親の理解、学校教育における体育の必要性、運動・スポーツ好嫌、運動に対する有能感など。（青年期女子の柔道に対する意識調査において、高橋が作成した調査用紙^{10), 11)}を使用）

(2) 柔道に対する項目

- ① 将来において自身の子供に柔道をさせたいか否か
- ② 柔道に対する態度尺度（感情的成分及び認知的成分から構成。高橋の尺度）^{6), 7)}
- ③ 柔道経験の有無

但し、①及び③については第1回目のみ調査実施

(3) 学習者の自己理解、他者に関する項目

- ① ローゼンベルグらのSelf-Esttem Inventoryを参考に、坂本が作成した「自尊感情を測定する10項目」（自己理解）
- ② 長島らによって開発されたSelf-Image Inventory「自己像を探る18項目」（自己理解）
- ③ 片野によるInterpersonal-Relationship Inventory「人間関係を見る12項目」（他者理解）

5. 方法及び手順

(1) 一般項目については、適当と思われる項目番号に○印をするか、該当する答えを記入させた。統計処理については、各項目の頻度及び%を算出した。

(2) 柔道に対する項目のうち柔道に対する態度尺度については、柔道の態度構造を明らかにするために、第2回目のアンケート調査を基に以下の手順で統計処理を行った。

- ① 態度質問紙の各項目は「非常に感じる」から「全く感じない」までの4件法で回答を求め、それぞれに4点から1点の得点を付与した。
- ② 態度に関する34項目の評定値に対して、共通性の推定値を1.0とした主因子解による因子分析を施した。（反復推定あり）
- ③ その結果、固有値1.0以上である因子を抽出した。
- ④ 更に得られた因子行列に対して、Normal Varimax回転を施した。
- ⑤ 因子の解釈・命名については、因子負荷量0.45以上の項目を原則として有効とし、解釈可能な範囲で命名を行った。

- ⑥ また、解釈・可能な因子については、因子平均得点を算出したが、高橋らの一連の研究結果^{6), 7), 8), 9)} から有効項目の選定を適宜行い、因子平均得点の算出への基準とした。
(因子の個人得点 <以降態度尺度得点) = 各因子に含まれる因子負荷量0.45以上の項目のうち因子を代表すると判断できる項目の評定得点 ÷ 項目数)
更に、第1回目の調査の結果についても、第2回目調査で抽出された因子に含まれる項目を基に統計処理し、態度尺度得点を算出した。
尚、因子解釈時にマイナスの負荷量を持つ項目については、評定点「4」が「1」に、「1」が「4」になるように変数変換を行った。
- (3) 自己理解については、自己の価値観や感情を問う10項目、並びに自己像を問う18項目でそれぞれ構成され、前者は「非常に感じる」から「全く感じない」までの4件法で回答を求め、後者は7件法で回答を求めた。また、得点の付与については、前者が4点から1点、後者が7点から1点とし、各項目の平均値、標準偏差などを算出した。
尚、他者理解については、親、教師、友達への認知を見る12項目を採用し、7件法で回答を求め、それぞれ7点から1点の得点を与えた。統計処理は、自己理解と同様に、各項目の平均値、標準偏差などを算出した。
- (4) 構成的エンカウンター・エクササイズ導入の効果を立証するために、第1回目調査時の態度尺度、並びに自己理解、他者理解の項目ごとの平均得点と、第2回目調査時のそれとを対応のあるT検定によって比較検討した。
以上、本研究におけるすべての計算処理は、spssプログラムによって行われた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 調査対象者の運動・スポーツに対する属性

調査対象者の運動習慣などの一般項目の回答結果については表1から表13に示した。その結果以下のような特徴が見出された。

① 運動習慣

表1には、週当たりの対象者の運動頻度が示してある。それによると62.8%の学生が、体育以外では運動を実施していないと回答しており、大学期の運動不足傾向が窺われた。

② 運動経験(クラブ活動)

表2には、対象者のタイプ別クラブ活動の経験を示した。学校や社会体育における運動クラブ経験率は65.1%と、かなり高いことが明らかになった。

また、表3に示した様に、運動クラブ活動経験者28名全ての親が、その活動を支持・支援していたことが明確となった。両親は、子供にとって最大の重要な他者である。その重要な他者から、理解と期待を受けて物事を遂行している実感を得ることは、非常に健全な環境であったと言える。従って、クラブ活動経験者については、両親との人間関係も良好に育まれてきたと思われる。

③ 学校体育における体育の必要性

表4～表7には、小学校から大学及び専門学校での体育の必要性について、対象者が2件法で回答した結果を示してある。その結果、どの時期においても概ね体育の必要性は認識されているものの、大学以上において18.6%の女子学生が「必要ない」と回答していることも示唆された。大学以上の高等教育機関では、学生の専門的知識享受へのニーズが高く、教養教育への関心度が必ずしも高いとは言い難いため、この結果は低率であると言え

表1 運動習慣(体育以外・週/回)

Table 1 Frequency of sports

項目	frequency	%	cum%
0回	27	62.8	62.8
1回	7	16.3	79.1
2回	4	9.3	88.4
3回	1	2.3	90.7
4回	3	7.0	97.7
5回以上	1	2.3	100.0
total	43	100.0	

表3 運動クラブ経験者の親の理解

Table 3 Understanding of parent to sports

項目	frequency	%	cum%
はい	28	100.0	100.0
いいえ	0	0.0	100.0
total	28	100.0	

表5 中学校での体育の必要性

Table 5 Necessity of physical education in junior high school

項目	frequency	%	cum%
はい	43	100.0	100.0
いいえ	0	0.0	100.0
total	43	100.0	

表7 大学や専門学校での体育の必要性

Table 7 Necessity of physical education in University

項目	frequency	%	cum%
はい	35	81.4	81.4
いいえ	8	18.6	100.0
total	43	100.0	

表9 将来の配偶者に対する期待感
(運動が得意なほうがよいか)

Table 9 The expectation to subject's husband

項目	frequency	%	cum%
はい	43	100.0	100.0
いいえ	0	0.0	100.0
total	43	100.0	

表2 クラブ活動のタイプ

Table 2 Experience of sports

項目	frequency	%	cum%
学校	6	14.0	14.0
地域	10	23.3	37.2
学校・地域	12	27.9	65.1
未体験	15	34.9	100.0
total	43	100.0	

表4 小学校での体育の必要性

Table 4 Necessity of physical education in elementary school

項目	frequency	%	cum%
はい	43	100.0	100.0
いいえ	0	0.0	100.0
total	43	100.0	

表6 高等学校での体育の必要性

Table 6 Necessity of physical education in high school

項目	frequency	%	cum%
はい	42	97.7	97.7
いいえ	1	2.3	100.0
total	43	100.0	

表8 運動・スポーツの好嫌

Table 8 Likes and dislike in sports

項目	frequency	%	cum%
はい	36	83.7	83.7
いいえ	7	16.3	100.0
total	43	100.0	

るが、現行の大学体育カリキュラムなどに問題がある可能性も孕んでおり、今後その原因を探ることは急務と言えよう。

④運動・スポーツに対する好嫌

表8には、対象者のスポーツや運動に対する好嫌度を示した。その結果83.7%の対象者が、運動・スポーツに対して好意的であることが明確となった。更に、将来の配偶者に対して、運動・スポーツが得意なほうが「よい」と回答した女子学生は100%であり（表9）、今日の青年期女子の配偶者選定条件が窺える。

⑤ 対象者の運動に対する自己有能感

対象者の運動に対する自己有能感を、「運動に対する自信」「運動神経の有無感」「体力の有無感」「運動に対する統制感」の4項目によって測定した。尚、「非常に感じるから」「全く感じない」までの4件法で回答を求め、それぞれについて4点から1点の得点を与えた。

その結果（表10～表13）、「ある」（感じる、非常に感じるの累積）と回答した割合は、「運動に対する自信」が41.9%、「運動神経の有無感」23.2%、「体力の有無感」27.9%とかなり低率であった。これらの項目は、伊藤の示す「身体的有能さ」尺度を構成する項目であることから、本対象者が、自己の身体的有能さを高く評価していないことが浮き彫りにされた。

表10 運動に対する自信

Table 10 The confidence to sports

項目	frequency	%	cum%
全く感じない	7	16.3	16.3
感じない	18	41.9	58.1
感じる	16	37.2	95.3
非常に感じる	0	4.7	100.0
total	43	100.0	

表11 運動神経の有無感

Table 11 The ability of exercise (be or not)

項目	frequency	%	cum%
全く感じない	11	25.6	25.6
感じない	22	51.2	76.7
感じる	9	20.9	97.7
非常に感じる	1	2.3	100.0
total	43	100.0	

表12 体力の有無感

Table 12 The Physical strength of subjects (be or not)

項目	frequency	%	cum%
全く感じない	10	23.3	23.3
感じない	21	48.8	72.1
感じる	9	20.9	93.0
非常に感じる	3	7.0	100.0
total	43	100.0	

表13 運動に対する統制感

Table 13 The expectancy to sports

項目	frequency	%	cum%
全く感じない	2	4.7	4.7
感じない	11	25.6	30.2
感じる	23	53.6	83.7
非常に感じる	7	16.3	100.0
total	43	100.0	

しかしながら、「運動に対しての統制感・どんな運動・スポーツでも努力すればできるようになる」との問いに対しては、69.8%の対象者が肯定的な回答（感じる・非常に感じるの累積）を示している。デシ²⁾が「努力によって環境をコントロールできる認知の高さ（統制感への認知の高さ）は、内的動機の高さを示唆する」と述べていることから、上述した「身体的有能さ」とは、逆説的な結果となった。

日本人女性は、社会的承認傾向がかなり高く、故意に自己の能力の高さを露呈しない傾向にあるとも言われていること、並びに対象者がトップアスリートの集団でないことを考

慮すれば、後述した「統制感の高さ」の結果を優先して考えることに無理はないと思われる。また、この傾向は高橋の先行研究¹⁰⁾でも確認されている。従って、本対象者は、運動・スポーツに対して概ね健全な自己有能感を有していると言っても問題はあるまい。

以上、対象者の属性について得られた結果について考察を加えてきたが、高橋の先行研究¹⁰⁾をほぼ支持することとなり、本対象者が、運動・スポーツに対して良好な認識を持ちえていることが示唆された。

表14 態度に関する因子分析結果（第二回目の調査結果から）

Table 14 Rotated factor loading and naming of factors (attitude towards judo)

因子	項目	因子負荷量
F1：徳性涵養因子	V24 決断力がつく	0.78310
	V26 積極的になる	0.83116
	V27 協力的になる	0.82690
	V28 責任感がます	0.81989
	V30 正義感が強くなる	0.64491
	V32 人を大事にする気持ちが強くなる	0.78017
	V33 明るくなる	0.52574
F2：逃避的感情因子	V6 危険な	0.89253
	V7 怖い	0.90406
	V8 痛い	0.87968
	V9 男性的	0.78606
	V10 苦しい	0.70722
F3：武道の心身鍛練因子	V14 力がつく	0.69995
	V15 持久力がつく	0.47908
	V20 健康になる	0.72162
	V21 日本の伝統文化として重要である	0.77350
	V25 忍耐力がつく	0.53109
	V29 礼儀正しくなる	0.68955
	V30 正義感が強くなる	0.43236
	V34 乱暴になる	-0.50663
F4：体力向上因子	V14 力がつく	0.44761
	V15 持久力がつく	0.61675
	V16 体が柔らかくなる	0.78613
	V17 平衡性が向上する	0.80985
	V18 動きが素早くなる	0.80947
	V19 プロポーションがよくなる	0.64992
F5：否定的感情因子	V11 暗い	0.69200
	V12 古くさい	0.84835
	V13 孤独	0.76738
F6：躰涵養因子	V4 近代的	-0.67423
	V23 子供の躰によい	0.78646
	V31 気持ちが落ち着く	0.55350
F7：肯定的感情因子①	V1 明るい	0.59922
	V2 楽しい	0.76405
	V3 さわやか	0.68039
F8：肯定的感情因子②	V4 近代的	0.48981
	V5 華やか	0.88415

* 因子負荷量 0.45 以上の項目を原則として因子の解釈に採用した

表15 相関行列の固有値
Table 15 Eigenvalue of rotated factor matrix

因子	固有値	貢献度(%)	累積貢献度(%)
1	6.64605	19.5	19.5
2	5.08239	14.9	34.5
3	3.52168	10.4	44.9
4	2.88550	8.5	53.3
5	2.18175	6.4	59.8
6	1.92299	5.7	65.4
7	1.30500	3.8	69.3
8	1.21563	3.6	72.8
9	1.13406	3.3	76.2

2. 調査対象者の柔道に対する態度構造（第2回目の調査から）

Varimax回転後の抽出因子及び因子負荷量を表14に示した。この結果、固有値1.0以上の基準で抽出された因子は9因子（表15参照）。そのうち解釈・命名可能な因子は、8因子であった。（回転後の貢献度の合計は、全分散の76.2%であった。尚、因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は、原則として0.45以上とした）

- (1) 第一因子については、「決断力がつく」「積極的になる」「協力的になる」「責任感が増す」「正義感が強くなる」「人を大事にする気持ちが生まれる」「明るくなる」などの項目に高い負荷量を示した。これらの項目は、柔道をとおした精神の鍛錬効果を示唆しているが、特に柔道が徳性の涵養に寄与するという観点から解釈される。従って、この因子を徳性涵養因子と命名した。
- (2) 第二因子に含まれる項目は、「危険な」「怖い」「痛い」「苦しい」などであった。これらは、文字通り柔道に対する逃避的な感情を表している。また、「男性的」という項目もこの因子に含まれているが、調査対象者が女性であったことが影響していると思われる。いずれにせよ、この因子を逃避的感情因子と命名した。
- (3) 第三因子については、「力がつく」「持久力がつく」「健康になる」「忍耐力がつく」「礼儀正しくなる」「正義感が強くなる」「乱暴になる」などの、身体的心身鍛錬の認知を示す項目と、「日本の伝統文化として重要である」という項目が含まれていた。但し、「乱暴になる」の項目の負荷量はマイナスであり、逆説的に解釈ができる。そこでこの因子を、武道的心身鍛錬因子と命名した。尚、因子の得点を算出する際には、「乱暴になる」の項目について、4点が1点に、1点が4点になるように変数変換を行った。
- (4) 第四因子に負荷量の大きな項目は、「力がつく」「持久力がつく」「体が柔らかくなる」「平衡性が向上する」「動きが素早くなる」「プロポーションがよくなる」であった。これらは、柔道が体力の向上に寄与することを示唆している。よって、この因子を体力向上因子と命名した。
- (5) 第五因子は、「暗い」「古い」「孤独」というように柔道に対するマイナスの感情を示した項目から構成されているので、この因子を否定的感情因子と命名した。
- (6) 第六因子を示す項目は、「子供のしつけによい」「気持ちが落ち着く」の2項目であり、柔道が今日的に期待される一側面を示した因子とも解釈できる。まさしく「養涵養因子」と命名できよう。尚、因子得点算出の際には、「近代的」というマイナスの因子負荷量の高

い項目は除外することとした。

- (7) 第七因子と第八因子それぞれに含まれる項目の内容は、柔道に対する肯定的感情を示している。従って、第七因子を肯定的感情因子①、第八因子を肯定的感情因子②と命名したが、因子の得点を算出する際には、これらに含まれる項目を複合することとした。故に、次項における態度の評価を行う際には、両因子を複合因子とし、考察を加えることとする。

以上、8因子が解釈・命名されたが、本調査対象者についても、高橋、矢野らの先行研究^{8), 10), 13)}とほぼ同様な因子構造を有していることが支持された。

3. 授業実施前後の柔道に対する態度変容及び態度の評価

表16には、それぞれの調査ごとの各因子における平均得点、標準偏差、及び各因子の継続的変容に対する有意水準を示してある(対応のあるt-testを施行)。

表16 態度尺度の平均得点及びT検定の結果
Table 16 Factor mean score, standard deviation, and t-test

因子名	第1回目調査結果		第2回目調査結果		t-test
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	
F1: 徳性涵養因子	2.628	0.745	3.027	0.653	****
F2: 逃避的感情因子	2.891	0.711	2.500	0.792	***
F3: 武道の心身鍛練因子	3.204	0.501	3.503	0.447	****
F4: 体力向上因子	2.888	0.571	3.070	0.622	*
F5: 否定的感情因子	1.841	0.555	1.558	0.625	*
F6: 羨涵養因子	2.361	0.744	3.151	0.744	****
F7: 肯定的感情因子 (* F7 + F8)	2.219	0.461	2.679	0.450	****

* ... p < .05 ** ... p < .01 *** ... p < .005 **** ... p < .001

そこで、まず第1回目の授業(オリエンテーション)後の調査結果から、柔道に対する学習者の態度について評価を行えば以下の如くである。

- ① 柔道は、精神や身体並びに羨に好影響を及ぼすという、効果的側面の認知が高いことが認められた。
- ② 感情的には、やや逃避的傾向にあるものの、柔道自身を決して否定するものではないことが明らかになった。

更に、上記の結果と、第14回目の授業(最終授業時)での調査結果との比較を行えば以下の様なことが明確になる。

- ③ 全ての側面において、柔道に対する態度評価が有意に高くなった。特にやや逃避的傾向にあった感情的側面にも大きな好意的変容が認められるとともに、子供に対する羨への効力感の上昇傾向が際立った。

ところで、第1回目の調査結果においてさえも、柔道に対する否定的傾向が、女性を対象にした高橋の先行研究^{8), 11)}と比較すると、顕著に低いことが理解された。その理由としては、殆どの対象者が、柔道を自発的に選択履修したことにあると推測される。しかしながら、本対象者の79.1%(表17)が、大学入学以前の学校体育で、柔道を経験していないことから鑑みれば、中学校や高等学校での柔道学習の更なる可能性を示唆する結果であったとも言える。いずれにしても、態度の各側面で統計的に有意な変容が認められたわけだが、上述した柔道学習の更なる可能性の

表17 学校体育での柔道経験

Table 17 Experience of judo in physical education

項目	frequency	%	cum%
はい	9	20.9	20.9
いいえ	34	79.1	100.0
total	43	100.0	

表18 学校体育での柔道学習希望(将来の子供へ)

Table 18 Needs of judo learning in physical education

項目	frequency	%	cum%
はい	34	79.1	79.1
いいえ	9	20.9	100.0
total	43	100.0	

一端を示したことにもなろう。すなわち、柔道授業に、構成的グループエンカウンターのエクササイズを導入することによって、従来高橋ら⁶⁾が、警鐘を鳴らしてきた諸問題（柔道のイメージアップ等）をも解決し得ることとなるわけだ。勿論、本研究では、教育的配慮から対照群を設けなかったため、態度の諸側面の評価が有意に高くなった理由を構成的グループエンカウンター理論導入の一点に限定することには無理がある。従って、今後は対象を中学生や高校生、あるいは小学生に広げて同様な視点からの授業研究の積み上げが必要となろうが、本ケースに限っては、その有効性が認められたといっても差し支えなからう。

更に、本研究では興味ある結果が得られている。対象者が、青年期の女性ということもあるが、将来の自身の子供に学校体育において柔道を行わせたいかとの問い（第1回目の調査結果）に対して、79.1%の対象者が「はい」と答えていることである（表18）。更に、嫉妬養因子の因子平均得点が、授業経験後には3点台になっていることに注目して戴きたい。教育としての柔道への期待が大きいことに疑問を挟む余地はなからうが、柔道そのものを経験することで、その効力感が有意に増していることは、我々柔道に携わる人間としては力強い。母親予備軍が、このような意識を持ち得れば、間接的にはあるが、柔道の普及に大いに好影響を及ぼすことになるに相違ない。

以上、既述のような結果を得たが、柔道授業に構成的グループ・エンカウンターを導入した際の効果を、更に明確にするために、自己理解、他者理解の各尺度について考察を進めることとする。

4. 対象者の自己価値観、自己像、及び人間関係認知、並びに柔道授業による影響

表19には、第1回目調査及び第2回目調査それぞれにおける対象者の自己価値観を問う10項目（自尊感情）の平均点、標準偏差、並びにT検定の結果を示した。二回の調査結果を概観し、先ず総括的に考察を加えることとする。日本人女性は特に社会的承認傾向が高いと言われていたが、本対象者も例に漏れず「自信がある」「良い素質を持っている」など直接的に自己の能力を評価する項目については、やはりその傾向が窺える。しかしながら、「自分は役に立たない」「全くだめな人間である」「自慢できることがあまりない」「敗北者だと思ふことがある」などの自己の価値観を軽んじるような項目では、それぞれを否定する傾向が強く、自己への良好な価値観を、対象者が有していると判断してもよいのではないか。

ところで、「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ」という項目のみが、 1.954 ± 0.754 (点) から 2.209 ± 0.773 (点) と、統計的に5%水準で有意な変容を来たしたが、授業場面で対象者に対して何らかの役割遂行を強いることがなかったことを鑑みれば、この変容が柔道授業による影響であるとは考えにくい。

表20には、各調査それぞれにおける対象者の自己像を問う18項目の平均点、標準偏差、並びに

表19 対象者の自己価値観・感情を表す項目の得点及びT検定の結果

Table 19 Mean score of self-esteem and t-test

項目	第1回目調査結果		第2回目調査結果		t - test
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	
S1: 自分に自信がある	2.160	0.814	2.093	0.718	
S2: 少なくとも人並みには価値がある	2.674	0.778	2.837	0.688	
S3: いろいろな良い素質を持っている	2.302	0.741	2.349	0.613	
S4: 敗北者だと思ふことがある	2.256	0.759	2.186	0.906	
S5: 物事を人並みにうまくやれる	2.512	0.768	2.558	0.765	
S6: 自分には自慢できることがあまりない	2.279	0.934	2.256	0.790	
S7: 自分に対して肯定的である	2.512	0.910	2.651	0.783	
S8: 大体において満足している	2.279	0.882	2.395	0.821	
S9: 自分が全く駄目な人間であると思ふことがある	2.279	0.854	2.233	0.922	
S10: 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ	1.953	0.754	2.209	0.773	*

* ... p < .05 ** ... p < .01 *** ... p < .005 **** ... p < .001

表20 対象者の自己像及びT検定の結果

Table 20 Mean score of self-image and t-test

項目	第1回目調査結果		第2回目調査結果		t - test
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	
勇敢な-臆病な	4.093	1.554	4.093	1.729	
頼りない-頼もしい	4.256	1.513	4.256	1.513	
狭い-広い	3.651	1.307	3.512	1.387	
賑やか-静かな	4.954	1.772	5.070	1.502	
慎重な-軽率な	4.488	1.804	4.233	1.631	
幸福な-不幸な	5.395	1.514	5.723	1.386	
陰気な-陽気な	2.861	1.582	2.302	1.319	**
嫌いな-好きな	3.302	1.597	2.837	1.526	*
活潑な-不活潑な	5.093	1.674	5.140	1.373	
鈍感な-敏感な	4.116	1.966	3.698	1.884	
真面目な-不真面目な	4.628	1.431	4.419	1.680	
平凡な-非凡な	4.465	1.486	4.070	1.682	
無口な-おしゃべりな	2.977	1.535	2.326	1.267	****
不正直な-正直な	3.237	1.377	2.814	1.547	
地味な-派手な	4.349	1.378	3.884	1.096	**
閉鎖的な-開放的な	3.237	1.541	2.744	1.274	*
でしゃばりな-引っ込み思案な	4.209	1.641	4.605	1.094	*
几帳面な-だらしない	3.884	1.942	3.930	1.857	

* ... p < .05 ** ... p < .01 *** ... p < .005 **** ... p < .001

T検定の結果を示した。

その結果、対象者の自己像には、かなりの好意的変容が窺われた。統計的に有意な項目での変容内容としては、「陰気から陽気へ」「嫌いから好きへ」「無口からおしゃべりへ」「地味から派手へ」「閉鎖的から開放的へ」「引っ込み思案からでしゃばりへ」であった。言うなれば、対象者自身の自己開示が促進され、より健全な自己イメージが定着したといっても過言ではあるまい。勿論、初回調査時の各項目の平均得点からも理解されるように、対象者は、もともと健全な自己象

を持ちえている。しかしながら、4ヶ月の間にこのような好意的変容が起きたことは、注目に値する。特に、本柔道の授業では、指導案を見れば分かるように、自己開示を促すエンカウンターを採用している。即ち、柔道授業における自由な雰囲気と、適切な自己開示によって、かなり健全な方向への自己イメージ変容が起きた可能性は拭えまい。

表21には、調査時それぞれにおける対象者の親、友達、先生への認知度、並びにT検定の結果を示してある。その結果本対象者は、親、友達、先生いずれに対しても非常に良好な認知を有していることが示唆された。また、調査1回目と2回目において、統計的な有意差が認められた項目は、「親の気持ちをわかりたいとは思わない」であり、この項目を否定する、すなわち「親の気持ちをより理解したい」という方向への変容であった。但し、柔道の授業では、友達と先生への関わりは深いものの、親への関わりは直接的でない。従って、この変容は、柔道授業自身の影響ではなく、他の要因が影響したものと推測される。

表21 対象者の親・友達・先生に対する認知度を表す項目の得点及びT検定の結果

Table 21 Mean score of interpersonal-relationship and t-test

項目	第1回目調査結果		第2回目調査結果		t-test
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	
H1:先生ともっと話したい	5.650	1.378	5.791	1.245	
H2:思ったこと感じたことを先生に率直に伝えることはよい	6.047	1.154	6.000	1.234	
H3:思ったこと感じたことを親に率直に伝えることはよい	6.163	1.132	6.186	1.220	
H4:先生の気持ち・考えをわかりたいとは思わない	2.605	1.417	2.372	1.254	
H5:先生に相談しても意味がない	2.581	1.590	2.372	1.398	
H6:親の気持ちをわかりたいとは思わない	2.070	1.590	1.674	0.944	*
H7:生んでくれたことを親に感謝したい	6.302	1.200	6.465	1.099	
H8:思ったこと感じたことを友達に率直に伝えることはよい	6.070	1.334	6.186	0.958	
H9:親に相談しても意味がない	2.186	1.651	2.047	1.308	
H10:友達と話すことで考え方・見方がます	6.233	1.394	6.395	1.498	
H11:友達のために自分のできることをしたい	6.279	1.031	6.349	1.031	
H12:母が好きである	6.279	1.315	6.558	0.666	

* ... p < .05 ** ... p < .01 *** ... p < .005 **** ... p < .001

以上、既述のような結果が得られたが、本対象者が、柔道に対して良好な態度を有すると同時に、柔道の教育性に対して大きな期待を寄せていることも明らかとなった。また、自己理解、他者理解ともに良好な認知を示した。更に、構成的グループ・エンカウンターを柔道授業に導入した際の効果について、柔道に対する態度変容、自己理解や他者理解の認知変容という観点から比較検討したが、その有効性を示唆する結果が得られた。しかしながら、対象群を設定しての比較研究でないことから、その有効性を一元的に断定してしまうのは困難がある。いずれにせよ、前述したとおり対象を拡大するとともに対照群を設定し、更なる検討・検証をしていく所存である。

IV まとめ

本研究は、柔道授業に、実施上無理のない程度に構成的グループ・エンカウンターのエクササイズを導入した際の、学習者の柔道に対する態度、他者理解、自己理解などの変容を調査・検討

し、その有効性を立証していくことを目的とした。その結果は、以下の如くである。

- (1) 調査対象者のクラブ経験率は65.1%とかなり高いことが示唆された。
- (2) 学校体育の必要性は、概ねどの学校時期においても肯定された。
- (3) 対象者は、運動・スポーツに関して好意的であることが明確となった。
- (4) 対象者は、運動・スポーツに対して健全な自己有能感を有していた。
- (5) Varimax回転後の解釈・可能な因子は8因子であった。(徳性涵養因子、逃避的感情因子、武道的精神鍛錬因子、体力向上因子、否定的感情因子、羨涵養因子、肯定的感情因子①、肯定的感情因子②)
- (6) 柔道は、精神や身体並びに羨に好影響を及ぼすという、効果的側面の認知が高いことが認められた。
- (7) 柔道に対する感情については、やや逃避的傾向にあるものの、柔道自身を否定するものではないことが明らかとなった。
- (8) 授業実施後において、柔道に対する態度の全ての評価が有意に高くなった。特に子供に対する羨への効力感の上昇傾向が際立った。
- (9) 対象者は、自己理解、他者理解ともに良好な認知を有していた。
- (10) 授業実施後において、自己理解を示す尺度・自己象に対する好意的方向への変容が示唆された。まとめの(7)の結果と併せて鑑みれば、柔道授業への構成的エンカウンター導入の効果が支持された。

参考文献

- 1) 朝日新聞、生活いきいき家庭、19、2000.1.1.
- 2) E. L. デシ著、安藤延男、石田梅男訳：内発的動機付け、誠信書房、357、1980.
- 3) 原岡一馬：態度変容の心理学、金子書房、423、1969.
- 4) 國分康孝編：構成的グループ・エンカウンター、誠信書房、358、1992.
- 5) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 総則編、東京書籍、1999.
- 6) 高橋 進、貝瀬輝夫、矢野 勝：柔道における高校生の意識構造について、武道学研究、17-1、92-94、1985.
- 7) 高橋 進、矢野 勝：柔道に対する中学生の態度について、関東学園大学紀要、14、137-144、1988.
- 8) 高橋 進、矢野 勝、磯村元信：柔道に対する女子高校生の態度構造について—男子高校生との比較から—、関東学園大学紀要、16、109-115、1989.
- 9) 高橋 進、貝瀬輝夫、菅原正明、森藤 才、若林 真：大学生と高校生の柔道に対する態度の差異について—認知的側面と感情的側面の比較—、武道学研究、22-1、33-44、1989.
- 10) 高橋 進、貝瀬輝夫、中村一成、柁澤博之、村田直樹、矢野 勝、斉藤 聡：青年期女子の柔道に対する意識について—青年中期の女性を中心として—、講道館柔道科学研究会紀要 第八輯、159-178、1999.
- 11) 高橋 進、高瀬 博、野瀬清喜、中村一成、今泉哲雄、柁澤博之：大学女子柔道履修学生の心理特性について、埼玉武道学研究、3、20-28、2000.
- 12) 徳永幹雄、金崎良三、多々納秀雄、橋本公雄：スポーツ行動の予測と診断、不昧堂出版、246、1985.
- 13) 矢野 勝、高橋 進：柔道に対する一般女性の意識構造について、和歌山大学教育学部紀要、38、29-37、1989.

資料 1

学習内容

第2時間目

(1) 本時のねらい

- ・柔道衣の名称の説明・着方並びに礼法・基本動作を練習する。
- ・極の形、立会(両手取、後取)の練習を通して柔道の日常的有効性を理解させる。
- ・後ろ受け身の重要性を理解させるとともに、段階的に単独練習、相対的練習をさせる。
- ・自ら進んで練習する意欲をたかめる働きかけを、エンカウンターを利用して行う。

学習内容

段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 (15分)		本時のねらいの説明し、次の留意事項を理解させる。 ・柔道は、相対的な運動であり、相手を投げたり、抑えたりする運動であることを理解させる。 ・特に受け身では、相対的な受け身を行うが、相手を支える手は「愛の手」であることを協調する。 ・相対的な練習の場合は、握手、10秒間の自己紹介を行わせ、なるべく相手を変えるように指示する。	
展開(1) (30分)	柔道衣の名称の説明・着方 礼法(立礼・座礼) 基本動作 (歩き方、組み方、崩し) 受け身 (単独での後ろ受け身) (相対的な後ろ受け身)	実際に柔道衣を着用する。 礼法 ・単独で座礼の練習をする。 ・単独で立礼の練習をする。 基本動作 ・すり足、歩み足を相対動作で行う。 ・組み方、崩し(八方の崩し)について説明し、実際に組む、崩しを体験する。 ・仰向けで手の位置を確認する。 ・足を投げ出した状態から、中腰→立位→前移動→後ろ移動をしながら後ろ受け身をする。	帯の結び方、名称についても理解させる。 ただ機械的に、礼をするのではなく、礼の本来的な意味についても言及する。 相対的な礼の練習では、互いに握手をし、10秒間の自己紹介をさせる。 *相手を変える場合は、握手ありがとうと声を掛けさせる その後、2人組みになり、組まずに一方の動きに合わせて、他方が動く練習をする。(鏡のように)なるべく、動作を速くという指示。 *勿論、相手を変えさせ、握手、10秒間の自己紹介。 相手を変えずに練習させる。 足を投げ出した状態から、体を後方にゆりかごの要領で、倒した時に頭が畳に打たないような指示(顎を引く、帯の結び目を見る)をする。 *頭が後方にとられる学生については、個別指導を行い、次の段階には無理に進ませない。

段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点
展開(2) (30分)	<p>(相対的な受け身)</p> <p>* 投げる、投げられるという初期感覚が実感でき、動機づけになることが予想される。</p> <p>極の形 (両手取・後取)</p> <p>* 相手との接触場所が、かなり大きくなるが、授業も後半なので、クラス全体、クラスメイトとの心理的距離も縮まったと思われる。従って、実技自身がエンカウンターに成り得ると推測する。</p>	<p>・ベアになり、中腰で、両手のひらを押し合い、崩れたらば、後ろ受け身を行う。</p> <p>ベアになり、立位で一方が、相手の肩を軽く持ち、前捌きで、小内刈の足動作を行い、相手の踵に自分の足のひらを触れさせる。触れられた一方は、それが合図で後ろ受け身を行う。</p> <p>・続いて、大内刈、大外刈。</p> <p>・ベアになり、両手取りを行う。</p> <p>・後取を行う。</p>	<p>* 勿論、相手を変えさせ、握手、10秒間の自己紹介。</p> <p>* ゲーム的な要素で行わせる。</p> <p>後方に倒れていく相手の肩を、しっかりと持ち続けることを指示。 (愛の両手、つまり引き手につながること並びに、柔道の練習では、お互いの信頼関係の重要性に触れる)</p> <p>* 自己の倒れる速度・高さによって受け身のタイミングが変わることを理解させる。</p> <p>* 相手を変える (握手・挨拶)</p> <p>* 相手を変えさせ、握手、自己紹介。 両手首をしっかりとつかませる。</p> <p>日常には、あまりない動作なので、ゆっくりと師範するとともに、相手の肘関節を控くので、安全に行わせる。</p> <p>* 相手を変える (握手・挨拶)</p> <p>* 但し、最後の一本背負投は、行わせない。</p>
まとめ (15分)	<p>* 柔道衣を正しく着用できるか。</p> <p>* 単独・相対的な受け身を通して、タイミングよく受け身ができるようになったか。</p> <p>* 極の形を通して、柔道の日常的な有益性を理解できたか。</p> <p>* 柔道の多面的な楽しさを実感できたか。</p> <p>* 友達ができただか、授業を受けている自分をどう思うか。</p> <p>以上の観点を確認させるとともに、簡単な授業評価・アンケートを取る。</p> <p>* 次回の学習内容の予告を行う</p>		

学習内容

第7時間目

(1) 本時のねらい

- ・ 固め技（縦四方固）を学習し、既習技を用いた簡易な約束練習ができるようにさせる。
- ・ 一本背負投を学習するとともに、安全に投げる、投げられて受け身ができるようにさせる。
- ・ 自ら進んで練習する意欲をたかめる働きかけを、エンカウンターを利用して行う。⑥

学習内容

段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入 (15分)		本時のねらいの説明し、次の留意事項を理解させる。 双方ともに協力して学習できるように注意を促す。(愛の手の強調) ・ 相対的な練習の場合は、エンカウンターのエクササイズを適宜指示することを説明する。 ・ 投げ技は、一本背負投を学習することを説明する。 ・ 固め技については、縦四方固を学習することを説明する。	
展開(1) (30分)	・ 縦四方固	・ 前時間に宿題を出していた、縦四方固のレポートから、任意抽出された学生が、縦四方固の形を再現する。 ・ 補足説明 ・ 仰向けの相手の上に馬乗りになり両脚で相手を制し、右手を相手の首にまいて両手を組み合わせ、右後頭部で相手の右腕を押し抑える。 ・ 互いに形の練習をした後は、抑えた形から20秒間押さえさせる。 背中合わせから、既習技を使った寝技乱取りを行う。 (エンカウンター)	* 数名に、説明させるが、決して否定をしない。 * 相手の首と右腕を、肩、腕せ抑え込んで相手の首と右腕の自由を完全に制する。 * 背中を丸めたり、腰を高くすると相手に返されやすいので、腕をはり腰を低くして抑える。 * 脚は、相手の脚に挟まれないように、両膝や両足で相手の体を挟んだり、両足首を組んだりしてうまく制するように使う。 * 出来るだけいろいろな人と交代する。 * 相手を変える（握手・挨拶） * 抑え切った人は、礼握手の後、抑えられた人の肩を揉む。

段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点
展開(2) (30分)	<p>一本背負投</p> <p>移動しての支釣込足・膝車</p>	<p>・「受」の足幅 肩幅よりやや広めに開く。</p> <p>・「取」の足の動作 ①右足を、「受」の右足の内側前方に進ませる。 ②右足を軸として、右足前回り捌きを行い、左足は、「受」の左足の内側前方に置く。</p> <p>・「取」の釣り手・引き手の動作 上記の足の捌きと同時に、引き手、釣り手を同時に利かせ、「受」を前方に崩す。続いて右手を「受」の脇の下から差し入れ、右肘内側を「受」の右脇下に密着させて、右腕をしっかりと抱きかかえて、右肩越しになげ落とす。</p> <p>・後方に移動し、体を捌いて膝車を行う。</p>	<p>* 相手を変える②</p> <p>* 体をさばく、両手を引いて崩す、両膝を一気に伸ばして臀部で跳ね上げる、引き落とすという動作が、よどみなく一連の動きで行なえるように練習させる。</p> <p>* 最初から、腰を曲げて、臀部を後ろに突き出した姿勢では、引く力が弱く効果がない。一瞬、体が後ろに弓なりに反った姿勢から、一気に上体を前に曲げ、膝を伸ばして、臀部で「受」の太ももを跳ね上げる感覚を覚えさせることが必要。</p> <p>* 両膝つきの背負い投げは、行わせない。</p> <p>* はじめは、ゆっくりとした動作で行わせる</p> <p>* 安全に投げること、投げられることを主眼に。</p> <p>* 投の形の、支釣込足の要領で行う。</p> <p>* 受が、協力することを強調する。</p>
まとめ (15分)	<p>* 柔道の多面的な楽しさを実感できたか。</p> <p>* 友達ができたか、授業を受けている自分をどう思うか。</p> <p>以上の観点を確認させるとともに、簡単な授業評価アンケートをとる。</p> <p>* 次回の学習内容の予告を行う。</p>		

資料2

このアンケートは、運動・スポーツについて、特に(柔道)について、皆さんの意見をお聞きするために実施するものです。また、皆さん自身のことについても若干お聞き致します。各質問では、適当と思われる項目番号に○印をするか、該当する答えをご記入下さい。ご協力の程宜しくお願い致します。

1. 性別 1. 男 2. 女
2. 年齢 1. () 歳
3. 職業 1. ()
4. 現在あなたは、運動を週何回ぐらい行っていますか。体育の授業は、除きます。
1. 週1回 2. 週2回 3. 週3回 4. 週4回 5. 週5回 週6回 7. 週7回 8. 0回
5. 体育の授業は週何回ですか。(中学生、高校生、大学、短大生、にお聞きします)
1. 週1回 2. 週2回 3. 週3回 4. 週4回 5. 週5回 週6回 7. 週7回
6. 体育の授業以外でどんな運動を行っていますか。一番時間を掛ける種目をお答え下さい。
回答欄 ()
7. 今までの学校体育で、楽しかった種目はどんなものですか。いくつか記入しても結構です。
時期 () 種目 ()
8. 今までの学校生活及び学校以外でクラブ活動や、運動・スポーツ(スポーツ少年団・スイミングなど)を特別に行っていましたか。
1. はい 2. いいえ
9. 「はい」と答えた方にお聞きします。
1. いつですか 2. どこですか 3. 何の種目ですか 4. どのくらい続けましたか
例 1. (中学校) 2. (学校クラブ活動) 3. (バレーボール) 4. (3年)
1. () 2. () 3. () 4. ()
1. () 2. () 3. () 4. ()
1. () 2. () 3. () 4. ()
1. () 2. () 3. () 4. ()
1. () 2. () 3. () 4. ()
1. () 2. () 3. () 4. ()
1. () 2. () 3. () 4. ()
- *上記に記入した運動で、一番年齢が若い時期に始めた運動のきっかけは何でしたか。
()
- *その運動を行っていた時、あなたのご両親は理解してくれましたか。
1. はい 2. いいえ
10. 小学校では体育は必要と感じますか。
1. はい 2. いいえ
11. 中学校では体育は必要と感じますか。
1. はい 2. いいえ
12. 高校では体育は必要と感じますか。
1. はい 2. いいえ
13. 大学や短大、専門学校などで体育は必要と感じますか。
1. はい 2. いいえ
14. 将来あなたの子供に、どんなスポーツを行わせたいですか。
回答欄 () *一種のみお答え下さい
15. それは、どんな理由ですか。簡単に説明してください
()
16. 将来あなたは、あなたの子供に、学校体育の中で、柔道を学習させたいと思いますか。
1. はい 2. いいえ
17. 将来あなたは、あなたの子供に、クラブ活動や社会体育などで柔道をさせたいと思いますか。
1. はい 2. いいえ
18. 現在日本を代表する運動・スポーツといえばどのような種目を連想しますか。
()
19. どうしてそのように感じますか。簡単に説明して下さい。
()
20. あなた自身、運動やスポーツを見たり、したりすることが好きですか。
1. はい 2. いいえ

21. あなたが、今行いたい運動やスポーツがあればお聞かせ下さい。
()
22. あなたの結婚相手は、運動やスポーツを行うことが得意な人のほうがいいですか。
1. はい 2. いいえ
23. あなたのご両親は、スポーツ・運動に関心がありますか。
1. はい 2. いいえ
24. あなたは、運動・スポーツについて自信がありますか。
4. 非常にある 3. ある 2. あまりない 1. まったくない
25. あなたは、運動神経がよいと思いますか。
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
26. どんな運動・スポーツでも努力すればできるようになると思いますか。
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
27. あなたは、体力があると感じますか。
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
28. あなたは、今まで、運動やスポーツの成績や結果を賞賛されたことはありますか。
1. はい 2. いいえ
29. あなた自身についてお聞かせ下さい。
- A) 自分に自身がある
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- B) 少なくとも人並みには価値がある
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- C) いろいろな良い素質もっている
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- D) 敗北者だと思うことがよくある
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- E) 物事を人並みにうまくやれる
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- F) 自分には自慢できることがあまりない
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- G) 自分に対して肯定的である
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- H) 大体において自分に満足している
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- I) 自分が全くだめな人間であると思うことがある
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない
- J) 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. あまり感じない 1. 感じない

31. あなたは今、人間関係についてどのように思ったり、考えたりしていますか。

Yes : そう思う or : どちらでもない No : そう思わない

Q. 私は、先生ともっと話をしたい。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 自分が感じたり、思ったことを、自分から先生に率直に伝えるのはよいと思う。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 自分が感じたり、思ったことを、自分から親に率直に伝えるのはよいと思う。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 私は、先生の気持ちや考えをわかりたいとは思わない。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 私は、先生にいろいろと相談しても意味がないと思う。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 私は、親の気持ちをわかりたいとは思わない。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 私は、この今の自分を生んで育ててくれた親に感謝したい。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 私は、友達に自分の気持ちや意思を、自分から率直に伝えるのはよいと思う。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 友達と話すことによって違った考え方や見方をいろいろ知るの、ためになると思う。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 私は、親にいろいろ相談しても、意味がないと思う。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 友達のために、何か自分にできることをしたい。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

Q. 私は、母が好きである。
 7 6 5 4 3 2 1
 Yes |-----| No

